

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2020年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	現代心理学研究科	映像身体学専攻
<b>研究代表者</b> (2021年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 5年 (学生番号: 16wy001j )		早川 由真 印
<b>指導教員</b>	所属部局・職		氏名
	現代心理学部・映像身体学科・教授		中村 秀之 印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
<b>研究課題</b>	〈ニュー・ハリウッド〉期のリチャード・フライシャー作品における映画的身体の存在論		
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・共同研究者) ※2021年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・ 博士課程後期課程5年		早川 由真
<b>研究期間</b>	2020 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 150,000円 / (採択金額) 150,000円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、〈ニュー・ハリウッド〉期、すなわち1968年から1975年のリチャード・フライシャー監督作品を対象に具体的なテキスト分析をおこない、それらの作品における映画的身体の特異な在り方を解明する研究である。まず、『ソイレント・グリーン』および『マンディンゴ』の作品分析をおこない、それぞれの作品における映画的身体の特徴的な在り方を明らかにした。また、これまでの個々の作品論を総括するための理論的な視座を構築し、博士論文の序論部分・結論部分として完成させた。さらに、研究成果を総合して最終的に博士論文を完成させ、提出し、博士号を授与された。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ リチャード・フライシャー } { 映画的身体 } { 存在論 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、〈ニュー・ハリウッド〉と呼ばれる時期区分、すなわち 1968 年から 1975 年頃のリチャード・フライシャー監督作品を対象に、具体的なテキスト分析をおこない、それらの作品における映画的身体の特異な在り方を明らかにすることである。本研究の具体的な成果は以下の通りである。

- ①『ソイレント・グリーン』および『マンディンゴ』に関する学会発表をさらに掘り下げ、博士論文の第 4 章および第 5 章として完成させた。
- ②個々の作品論を総括するための理論的な視座を構築し、博士論文の序論部分・結論部分を完成させた。
- ③これまでの研究成果と併せて上記の成果を総合し、博士論文「〈ニュー・ハリウッド〉期のリチャード・フライシャー—映画的身体の存在論」を完成させ、提出し、博士号を授与された。

上記の通り、研究成果はすべて最終的に博士論文としてまとめられ、博士号を授与される結果となった。したがって、研究成果の概要として博士論文（以下、博論と表記）の概要を以下に記す。

\*\*\*\*\*

博論では、映画監督リチャード・フライシャーが〈ニュー・ハリウッド〉期すなわち 1968 年から 1975 年のあいだに手がけた 5 本のフィルムを対象にテキスト分析をおこなった。アカデミックな映画研究、および作家主義的な批評の多くは、これまでフライシャーを「作家」として認識してこなかった。フライシャー作品のもつスタイルの独自性に着目した先行研究や批評テキストはいくらか存在するが、その歴史的な意義や映画理論における意義について、映画研究（映画学）の領域で十分に論じられてきたとは言い難い。つまり、フライシャー作品にかんして学術的な要件を満たすような体系的な研究は存在していなかった。そこで私は、新たな理論的・方法的視座を導入し、これまでには見過ごされてきた作品の細部に光をあてることで、フライシャー作品のもつ歴史的・理論的な意義を明らかにし、映画研究の領域に新たな知見を提示することを試みた。このような目的に向けて導入した理論的・方法的な視座とは、映画的身体の存在論というアプローチである。

序論では、上記の目的の説明に加え、〈ニュー・ハリウッド〉を対象とするうえでの諸問題を述べたうえで、方法としての映画的身体の存在論的アプローチについて詳述した。プロダクション・コードが崩壊し、様々な世代の作り手が現れた〈ニュー・ハリウッド〉は、アメリカ映画史において混沌とした時期だと言える。〈ニュー・ハリウッド〉をとらえるうえで、先行研究は暴力的・性的イメージの可視化および氾濫に着目してきた一方で、ヴェテラン世代であるフライシャーの作品をほとんど無視してきた。だが、博論において対象とした 5 本のフィルムは、〈ニュー・ハリウッド〉に対して独特の仕方で批判的な距離を提示しているのだ。それらは、「古典的」あるいは「ポスト古典的」という二項対立ではとらえられない複雑な性質を備えている。それらのフィルムをとらえるうえで鍵となるのは、映画的身体が提示される独特の仕方にもなう暴力性である。

映画的身体とは、視覚的な身体イメージ（映像）と聴覚的な声（音）の多様な結びつき（あるいは分裂）によって構成される存在である。映画的身体の在り方やそれについての経験を規定しているメカニズムそれ自体、とりわけ映画の原理的・技術的な特性それ自体を反省的に浮かびあがらせることを、ここでは存在論的アプローチと呼んだ。映像と音の分裂、あるいはフレーミングやモニタージュによって断片化した映画的身体は、一本のフィルムのなかで統一され、なんらかの同一性を備えることになる。〈ニュー・ハリウッド〉期のフライシャー作品は、同時期に氾濫した激しい暴力表象とは異なる暴力性を、そのような映画的身体の統一に関連した仕方で提示しているのだ。

**研究成果の概要 (つづき)**

本論は 5 つの章で構成され、各章がひとつの作品を論じている。各章の概要は以下の通りである。まず第 1 章では、『絞殺魔』(*The Boston Strangler*, 1968) でトニー・カーティスが演じるアルバート・デサルヴォという存在について論じた。先行研究は、デサルヴォが〈第 2 の人格が真犯人である分裂した存在〉であるという前提に立っていた。だが、この作品にはこうした前提では理解できない部分がある。そこで、テキスト内外の諸要素を多角的な観点から分析し、デサルヴォの在り方の特異性を明らかにする。まず、スター・イメージやメディア言説におけるデサルヴォ像を検証したうえで、不可視性や声を手がかりに、デサルヴォを真犯人として見せるプロセスにおける綻びを見出す。そして、デサルヴォをキャラクターとして主体化しようとする可視化の暴力のメカニズムを明らかにし、最終的には映画的身体という存在を規定する原理そのものが反省的に問題化されていることを指摘した。

つづく第 2 章では、『10 番街の殺人』(*10 Rillington Place*, 1971) における映像と音の分裂的な関係に着目した。この作品では、声と比べてこれまでの映画理論ではあまり着目されてこなかった呼吸音という要素が重要な意味を持っている。まず、この作品における即物的な音の使用法を確認しつつ、60 年代後半から 70 年代のドルビー・システムに至る録音・音響技術の変革の流れのなかに作品を位置づける。次に、声や呼吸音、さらに身ぶりの分析を通じて、目的を志向するジョン・クリスティ(リチャード・アッテンボロー) と不安定なティモシー・エヴァンズ(ジョン・ハート) というそれぞれの存在様態を対比的に描き出す。そして最終的に、呼吸音という要素が、声とは異なる仕方で身体イメージへの帰属から逃れてゆくことを明らかにした。

第 3 章では、『見えない恐怖』(*See No Evil*, 1971) を対象に、キャラクターの生成(およびその不成立)のメカニズムを論じた。鍵となるのは、盲目の主人公・サラ(ミア・ファロー)が入浴中に襲われるクライマックスにおいて、カメラが水中から殺人者を見上げるショットの意味作用である。まず、サラの「視点」を示すかのようなこのショットを〈盲者の視点ショット〉としてとらえる視座を導き出す。次に、縫合理論をキャラクターの生成という観点から整理しつつ、殺人者というキャラクターの生成(およびその不成立)のメカニズムを明らかにしていく。最終的に、水中からのショットにおいては、不可視性と暴力が錯綜した複雑な事態が生じていることが浮き彫りになる。

第 4 章で論じるのは、『ソイレント・グリーン』(*Soylent Green*, 1973) が提示する、キャラクターの生/死にとどまらない、映画的身体の独特の生命である。そこで着目するのは、「ホーム」という施設でソル(エドワード・G・ロビンソン)が絶命するクライマックスのシーンである。このシーンは、これまで環境に関するソルの内面的なノスタルジアという観点から説明されてきた。しかし、このシーンの重要性は、イメージや音との遭遇という出来事、そしてこの遭遇によって死に至ることにある。そこで、映像と音の原理的な分裂を手がかりに、このシーンで描かれる死の意味を作品に即して明らかにすることで、映画的身体の生命の在り方を浮かびあがらせた。

最後の第 5 章では、『マンディンゴ』(*Mandingo*, 1975) における色調と身体について論じた。南北戦争以前のアメリカ南部における奴隷制を描いたこのフィルムは、露骨な人種差別や大胆な性と暴力の描写によって様々な議論を巻き起こした。本章で着目するのは、このフィルムが差別や暴力を光の設計という原理的なレベルで問題化していることだ。鍵となるのは、周到な光の設計によってもたらされる、「白(人)」と「黒(人)」という二項対立ではとらえられない映画的身体の曖昧な色調である。そうした曖昧な色調をもたらす光の設計と、「白」と「黒」という属性を明確に区別する光の設計を分析していくことで、キャラクターの同一性を顕在化させるメカニズムの暴力性を明らかにした。

以上、作品分析を通じて、以下のことが明らかになった。これらのフィルムは、イメージが可視的に示されることそれ自体が孕む暴力を提示し、さらにそのような暴力に対して映画的身体が受動的に巻き込まれることを、映画的身体をキャラクターとして統一するメカニズムとの関連において、それぞれの仕方で提示している。このような仕方で提示される暴力性こそが、同時期に対する批判的な距離として表れているのだ。以上が、研究成果としての博論の概要である。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① 雑誌論文 (0 件)**

**② 図書 (0 件)**

**③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (0 件)**

**④ その他 (1 件)**

(1) 早川由真「〈ニュー・ハリウッド〉期におけるフライシャーのスタイルとは何か--マーガレット・ヘリック図書館 “Richard Fleischer papers” 調査報告」、日本映像学会第 46 回大会、関西大学 (オンライン開催)、2020 年 9 月 26～27 日、発表採択後取り下げ。(※)

(※) 新型コロナウイルス感染症の影響で当初 5 月 30～31 日に予定されていた学会が延期となり、9 月 26～27 日にオンラインでの開催となった。当初私は 5 月の学会に参加する予定であり、発表も採択されていた。しかし、延期後の 9 月下旬は博士論文を仕上げるための最重要時期であったため実質的に発表は不可能となり、取り下げる結果となった。